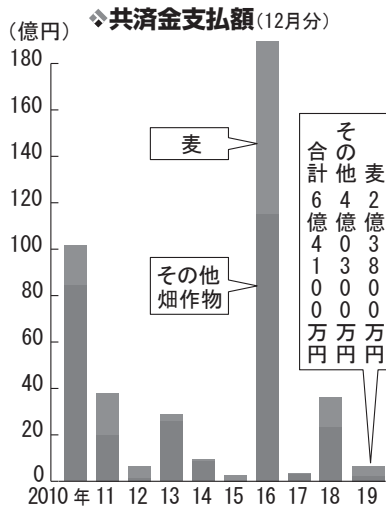


十勝農業共済組合は、2019年12月支払い分（小麦、一部豆類、ジャガイモ、タマネギ）の共済金額をまとめた。18年12月分より約30億円減少し、約6億4100万円だった。JA取扱高が過去最高を記録するなど、全般的に好調だった1年を反映した。



共済金は基本的に12、1、3、5、8月に支払われ、19年12月分は昨年12月26日に支払われている。対象作物すべてが被害を受けた場合の共済金額に対する、実際の支払金額の割合「金額被害率」は麦で0.7%、その他畑作物は1.6%となっている。

小麦を中心とする麦は2億3800万円。春先は少雪に伴う被害も見られたが、その後は天候に恵まれて順調に生育、収穫もスムーズに進んだ。共済金を支払った農家戸数は267戸で、加入農家の7.9%。

その他の畑作物は4億300万円。極端な被害はなかったが、7月上旬の日照不足で枝豆の実がうまく入らない状況だったほか、ジャガイモやタマネギも一部で低温の影響があった。支払農家戸数は528戸で、加入農家の20.9%。

小豆やインゲン類は今回から、ほ場調査による「半相殺方式」と実際の出荷量を調査する「全相殺方式」（損害評価）を選択できるようになり、対象となる農家の約85%が後者を選択。この分は5月に仮払いになるため、12月分が減った一要因となった。

同組合は「日照不足で一部豆類が影響を受けるなど心配な面はあったが、全体的に大きな被害はなかった」としている。

帯広市は2019年の市内農業産出額（推計値）をまとめた。前年比4.2%増の324億5500万円で、過去2番目。耕種は平均気温、日照時間とも平年を上回り作物の収量を確保、畜産は乳価の上昇や肉用牛の取引価格が堅調に推移し過去最高となった。

10日の市議会産業経済委員会で報告された。

小麦は5月に干ばつや猛暑の影響が心配されたが、6～7月は平年並みの気温となり実の成熟が進行。43.4%増の63億5200万円となった。

豆類・雑穀は5月の干ばつで発芽にムラが見られたが、その後の好天で生育は回復し取引価格も堅調に推移、6.6%増の29億1300万円だった。

ジャガイモは総収量、規格内収量とも平年をやや上回ったが、生食用の取引価格が低下し、2.8%減の40億9300万円。

ビートは肥大が順調に進み前年並みの収量を確保。半面、秋口の気温が高く、寒暖差が少なかったことから平

均糖度は前年より低下し、3.2%減の41億2000万円だった。

野菜・花きはナガイモが品質・収量ともに平年を上回ったが、ダイコン、ニンジンの根菜類で取引価格が大きく低下。全体で15.5%減の42億6300万円となった。

畜産は2.4%増の107億1500万円で、過去最高を記録した。生乳は年間を通じて順調に推移し、平均乳価も上昇した。肉用牛は個体取引数が減少したが、素牛や枝肉の取引価格が堅調に推移した。